

月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.157

「EX」の第2弾は名物神父が登場！
『英雄伝説 暁の軌跡』

ファルコムニュース

英雄伝説 碧の軌跡
ショートストーリーズ

あの名作がPlayStation 5／PlayStation 4で甦る！
『イース・メモワール -フェルガナの誓い-』

ここは……情景の島!?
オリビエたちの運命はいかに!!

も〜っと集まれ！ファルコム学園



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS



PlayStation 5／PlayStation 4 版の発売が決定！

2005 年に Windows 版が発売され、2010 年には PlayStation Portable（PSP）でも発売された『イース』シリーズでも屈指の人気を誇る『イース フェルガナの誓い』を HD リマスター化し、様々な追加要素をプラスした『イース・メモワール - フェルガナの誓い -』が、2024 年 5 月 23 日に発売されることが決定！
パッケージ版の永久特典として、ジャケットが PSP 版の（クラシック Ver.）とリバーシブル仕様になっているほか、初回特典として、同作の原作となる PC-8801 版『ワンダラーズ・フロム・イース（イースⅢ）』の全楽曲を収録したサウンドトラック『ミュージック・フロム・イースⅢ』の復刻リパッケージ版も収録！ ダウンロード版でも『ミュージック・フロム・イースⅢ』のデジタルサウンドトラックが早期購入特典として付いてくるので、名盤と名高いながらも現在は入手困難な珠玉の一枚を楽しむことが可能だ。
爽快なアクションはもちろんのこと、エレナ、チェスターといった今作の魅力溢れるキャラクターに、待ち受ける強力なボスたち。そして、珠玉の BGM と、シリーズの魅力を心ゆくまで楽しめる名作を PlayStation 5／PlayStation 4 でもぜひプレイしてみよう！

製品情報：イース・メモワール
-フェルガナの誓い-
発売日：2024年5月23日発売
ジャンル：アクションRPG
対応機種：PlayStation 5／PlayStation 4
プレイ人数：1人
価格：【パッケージ版】4,840 円（税込）
【ダウンロード版】4,840 円（税込）
CEROレーティング：B（12才以上対象）




●リバーシブルパッケージ（永久特典）


●ミュージック・フロム・イースIII 復刻リパッケージ版（初回特典）

Prologue




燃えるような赤い髪と少年の様にどこまでも澄んだ黒い瞳―。

後の人々に世紀の大冒険家と呼ばれることになる若き冒険家、アドル・クリスティンは、古代王国イースを巡る大冒険の後、まだ見ぬ新たな冒険の地を目指して親友である元盗賊のドギと共に世界各地を巡る旅に出る。

それから約２年後―

各地を旅する中、二人はとある街でドギの故郷・フェルガナ地方に関する不穏な噂を耳にすることになる。
火山活動の活性化、突如出現するようになったという魔獣の群れ、領主の圧政に苦しむ領民の嘆き…

「フェルガナで何か不吉なことが起きている―。」

異変の真相を確かめるべく、ドギと共にフェルガナ地方を目指す事にしたアドルには、ある予感があった。
何かが待ち受けているという、ほとんど威嚇的ともいえるほどの雰囲気が、フェルガナの地全体から押し寄せてきていたのだ。




「さぁ、あと少しだ。行こうぜ、アドル。」

ドギはそう言うと前よりも力を込めて船を漕ぎはじめた。
アドルは、まとわりつくような予感を振り払うと櫂を握る手に力を込めた。

これより、遠きフェルガナの地にてアドル＝クリスティンの新たなる冒険の幕が開ける…

ドギ
（CV：玄田哲章）



アドルの相棒にして旅の仲間。
元盗賊だが義理人情に厚く、お人よし。
腕っ節が強く、豪快な性格。フェルガナ地方にあるレドモントの街で少年時代を過ごすが、8年前に旅立つ。旅先でフェルガナ地方の異変を聞き、アドルとともに久々の故郷を訪れる。

アドル・クリスティン
（CV：梶裕貴）



本作の主人公。19 歳。
燃えるような赤髪と、澄んだ黒い瞳をした青年。
生まれついての冒険家で、いつも新しい世界と冒険に対する好奇心に満ちている。
親友ドギとともに各地を旅していたが、ドギの故郷に関する不吉な噂を耳にして、フェルガナ地方を訪れる。

チェスター・ストダート
（CV：伊藤健太郎）



ドギの幼なじみ。
孤児となっていたところを、妹のエレナとともにレドモントの町長エドガーに引き取られ、宿屋で働くドギと知り合う。
その後、街に小さな家を構え、エレナを養いながらエドガーの仕事を補佐していた。
1年前、フェルガナ地方に異変が起きた前後にレドモントの街から姿を消す。

エレナ・ストダート
（CV：野中藍）



チェスターの妹。
幼いころは兄とドギに混じって野山を駆け回って遊ぶような活発なおてんば娘だったが、今では見違えるほど娘らしく成長している。
可憐な外見ながらも、その内には激しいものを秘めており、時折、周囲を驚かせるほどの行動力を見せる。
気立てがよく、働き者で、町の人々から愛されている。



『英雄伝説 閃の軌跡』のアリサたちが魔法少女に!?
脚本家・山下憲一（TV アニメ『みんな集まれ！ファルコム学園』）と漫画家・さがら梨々（コミック『閃の軌跡』）の強力タッグが贈るシナリオブックが登場！　平穏な日常に突如現れた怪物。その時、アリサのキーホルダーが不思議な光に包まれて……!?
あなたにお届け!
愛と希望の流れ星!
魔法少女
まじかる☆アリサ
決定稿
著：山下憲一
イラスト：さがら梨々
原作：日本ファルコム
好評発売中!
判型：A5正寸／ページ数：160／定価：1,300円（税別）／ISBN978-4-8021-3131-5
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©KENICHI YAMASHITA,RIRI SAGARA 2018 ©2018 FIELD-Y
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら→www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら→www.field-y.co.jp/falcombooks



英雄伝説
閃の軌跡06
原作／日本ファルコム
脚本／恵村まお　漫画／さがら梨々
A5判　160P　定価：本体991円+税
ISBN 978-4-8021-3123-0
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©SAGARA RIRI 2018
好評発売中!!
エレボニア帝国に吹き荒れる陰謀の嵐!
時代が選ぶのは果たして誰か!?
そして友という絆に背を向け、
両雄相まみえる!
激動のクライマックス!
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら→www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら→www.field-y.co.jp/falcombooks

★ダジャレから始まる物語★





喰うものと喰われるもの



悪のシステム



JKという概念



考えた者



最強の一角



孤独のパニック



喪失者たちの集い



王子たちの羞恥心



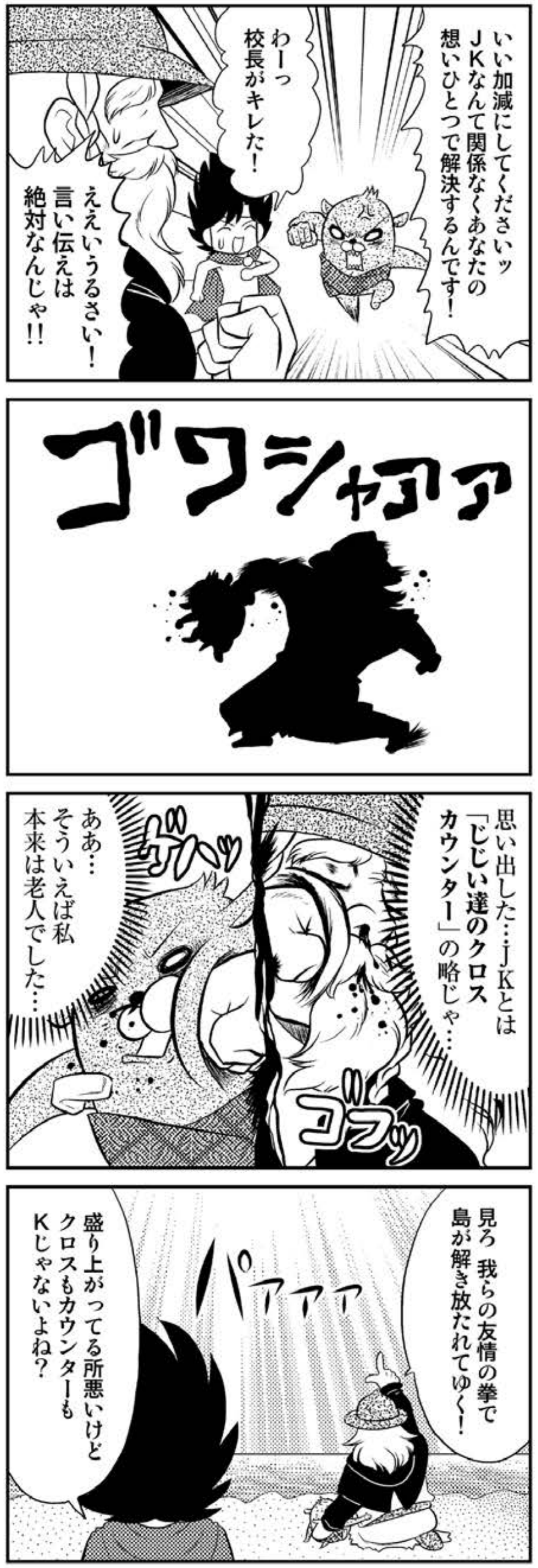
「理」の盲点



巻き込まれ事故



想い(こみ)の力



いつもニコニコツケ払いなの




英雄伝説 創の軌跡
THE MISERABLE SINNERS 01
漫画：墨天業
《仮面の隠者》《暗殺者》《自律人形》
それぞれの思惑を胸に
運命と真実に迫る物語
定価:1000円(本体909円+税)
ISBN978-4-8021-3309-8
発行:フィールドワイ 発売:メディアパル
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©BOKUTENGOU ©Field-Y


穏やかで騒がしい生活が戻ってきたファルコム学園。
徐々に英雄、戦士、さらには曲者までが還ってくるなか、
新たに「イースⅨ」のキャラクターも参戦！
まだまだ止まらない異能・新久保だいすけの筆が冴え渡る！
おまたせ！
待望の第2巻だよ！
も〜っと集まれ!
ファルコム学園②
新久保だいすけ
定価：本体 900 円+税
ISBN 978-4-8021-3213-8
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©DAISUKE ARAKUBO ©2020 FIELD-Y

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

「軌跡シリーズ」新グッズ予約受付中！



「軌跡シリーズ」新グッズ予約受付中！

【軌跡シリーズ くるみたびぬい Vol.1（6種）】

ふわふわ生地にくるまれた、手のひらサイズ。
お部屋に並べて飾ったり、一緒におでかけできる手のひらサイズです。
■**発売日**：2024年7月中旬

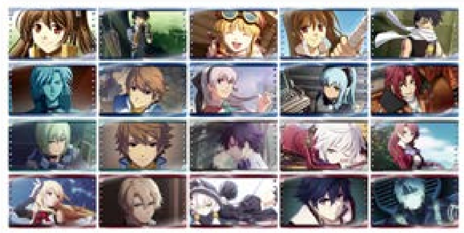


【軌跡シリーズ グリッターアクリルブロック Vol.1（6種）】

流れるグリッターが綺麗で、金の箔押し加工の名前入りデザインのアクリルブロックです。
■**発売日**：2024年5月下旬

【クリアカードコレクション（1パック2枚入)】

ゲーム内オープニング映像からセレクトしたクリアカードです。
■**発売日**：2024年6月中旬



販売ページ
https://tapioca.co.jp/products/list?category_id=276

「イースX」彫刻ボトル＆新グッズ登場！

10作目の発売を記念した「イースX」赤ワインの彫刻ボトルが登場、受注開始。その他の新商品も登場しました。





職人さんが1本1本丁寧に仕上げており、シリーズ生誕35周年記念にふさわしく高級感あふれるデザインです。



【「イースX」彫刻ボトル】

種類：赤ワイン　**容量**：750ml　**産地**：スペイン　**アルコール度数**：13.5%　**タイプ**：スティルワイン
■**受注期間**：2024年2月15日（木）～3月5日（火）
■**お届け予定**：2024年5月下旬より順次
■**発売**：株式会社A3
■**彫刻ボトル**：https://eeo.today/store/101/products/detail/99363?utm_source=twitter&utm_medium=social&utm_campaign=20240215_YSXN
■**その他グッズ**：https://eeo.today/store/101/title/138

ホワイトデー「イースX」ケーキ＆マカロン登場！

「イースX -NORDICS-」男性キャラクターのホワイトデーケーキとマカロンがプリロールから登場。1商品お買い上げごとにオリジナルデザイン缶バッジ（非売品）を1点プレゼント！

※クール冷凍便でお届け
※規定数量に達した時点でご注文受付終了

■**販売元**：プリロール
■**発売元**：株式会社栄通

ご購入はこちら
https://priroll.jp/shopbrand/ct12067/



Pin Box『イースX』Tシャツ＆フーディ発売

イギリスのピンバッジの会社「PinBox」さんから、『イースX -NORDICS-』のTシャツ、ジップフーディが登場。
日本からもご購入いただけます。







販売ページ
https://www.pinbox.store/collections/ys

Nintendo Switchに登場！ EGGコンソール『イースPC-8801mkIISR』配信開始

Windows向けレトロゲーム配信サービス・プロジェクトEGGのNintendo Switch展開である“EGGコンソール”に『イースPC-8801mkIISR』が登場。







■**配信日**：2024年2月15日（木）
■**My Nintendo Store**：https://store-jp.nintendo.com/list/software/70010000075600.html

THE LEGEND OF HEROES

暁の軌跡

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。
2月は「ナハトの奮闘記 EX」の第２弾がスタート。ナハトとケビンの出会いに注目！
「極秘資料館」は 2021 年実装の衣装替えから４着をピックアップ！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/
公式 X
https://twitter.com/akatsuki_ujj

期間限定イベント「ナハトの奮闘記 EX.2 ケビン編」が実装！

ある男の調査をするため鉱山町マインツへやってきたナハトは
同じ案件で訪れていた神父ケビン・グラハムと出会う。
“奇跡”と崇められている謎の巡回神父の秘密を暴くことはできるのか…？









※このイベントは 3/27 に終了となります。

※画像は開発中のものです。※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。

『暁の軌跡』極秘資料館

「バレンタイン・アネラス」衣装デザインラフ
（2021 年２月実装）



「お雛様・ティオ」衣装デザインラフ
（2021 年２月実装）



「制服・ノエル」衣装デザインラフ
（2021 年４月実装）



「《銀》」衣装デザインラフ
（2021 年３月実装）




FB ファルコムBOOKS
これを読むまでしぬでないぞ!!
『月刊 Falcom magazine』に掲載された読み切りコミック 13 本を完全収録したコミックアンソロジーがついに登場！ 新旧ファンも納得のラインナップで贈る、ファルコム愛溢れる1冊を是非ご堪能あれ！ カバーは『英雄伝説空の軌跡』コミカライズを担当した啄木鳥しんき先生の豪華描き下ろし♪
好評発売中!!
ふぁるこむコミックざんまい
収録テーマ作品
『イース』
『ブランディッシュ』
『ヴァンテージマスター』
『くるみん』
『ザナドゥネクスト』
『軌跡シリーズ』
価格：本体920円+税
ISBN 978-4-89610-818-7
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら www.field-y.co.jp


リベール王国に姿を現した、
結社《身喰らう蛇》の牙・執行者たち。
その動きと示し合わせたかのような
エレボニア帝国の不穏な行動に王国は揺れる。
そして物語は、古代ゼムリア文明の精華・
リベル＝アークへと飛翔する！
リベール王国次期女王たるわたくしの名に賭けて！
英雄伝説 空の軌跡SC
～絆の在り処～⑥
啄木鳥しんき
定価：1000円（本体909円+税） ISBN 978-4-8021-3294-7
発行：フィールドワイ 発売：メディアパル
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©Kitsutsuki Shinki
©FIELD-Y
◉フィールドワイ公式HPはこちら www.field-y.co.jp
◉ファルコムブックス公式HPはこちら www.field-y.co.jp/falcombooks

ロイドの章

その日、彼女が《それ》を拾ったのは、まったくの偶然だった。
クロスベル警察に特務支援課が作られ、そこにロイドたちが配属される時より、数年前。クロスベルも今ほど隆盛ではなく、しかしそのバブルとも言える繁栄の萌芽が芽吹きはじめた頃である。
街にはようやく導力車が少しは行き交うようにはなったが、大変高価で、庶民には決して手の出るものではなかった。今は乱立している高層建築も、当時は少ないものである。とはいえ、二、三のビルが、人々の衆目を集めていた。
大通りですらその状況なので、市街地に入ってしまえば、今のクロスベルとほとんど変わらない、生活感あふれた街並が広がっている。
そんな住宅街の少し開けた広場で、彼女は《それ》を拾った。もっと正確に言うと、奪った。
「んんんん……？」
大きくてくりくりした目をまん丸に見開いて、《それ》を見つめているのは、十二、三歳ぐらいの少女だった。
服はデニム地のオーバーオール。たくさんポケットが付いていて、汚れても平気で、しかも楽。彼女にとって洋服とはオシャレに着飾るものではなく、用を為せばそれでよい、とい

うものだった。そのオーバーオールの中には、着古したTシャツ。首元が少しくたびれている。
やや短めの茶色の髪は後ろで縛られていて、キャップを前後逆にしてかぶっている。パッと見は、少女というより少年に見えなくもない。
彼女の横では、《それ》を取られたらしい猫が、抗議の声をあげていた。
とはいえ、彼女の耳にはまったく届いていない。彼女は興味のあるものを見つけると、周りのことがまったく気にならなくなってしまうのだ。
たとえ、友だちふたりに大声で話しかけられたとしても、である。
「ウェンディ、ウェンディ、ウェンディ！」
「おーい、もしもーし」
声をかけていたひとり、背が少しだけ低い方の男の子に肩を揺さぶられ、ウェンディと呼ばれた少女はようやくその存在に気がついたようだった。
「あら、ロイドにオスカー。いたの？」
「さっきからずっと呼んでたんだけど？」
そう言って、ロイドと呼ばれた少年はむくれる。
茶色の髪に、男としては少し長めの襟足。髪型こそ十八歳の頃と変わらないが、その顔つきはまだ幼く、少年の面影を多分に残している。

服装はTシャツの上にシャツを羽織り、下はカーゴパンツ。動きやすい服装でまとめている。
「ウェンディは夢中になるといっつもだからなぁ～」
そう言って、オスカーと呼ばれた少年がヘラヘラと笑う。
背はロイドより少し高い。紫色がかった髪に、整った顔立ち。美形、というほどのインパクトはないが、年の割には大人びた雰囲気を持った少年である。
カットソーにチノパンという、やや落ち着いた服装も、大人びた雰囲気を醸し出すのに一役買っていた。
とはいえ、今のように笑うと年相応の少年のあどけなさを見せる。
「で、何をやってたの？」
「ずいぶんと熱心に見てたけど……」
ふたりの問いかけに、ウェンディは勢いよく手のひらを差しだした。
「これよ！」
「これは……」
それは、細長い筒状の形をしていた。長さはウェンディのような子供の手から少しはみ出るぐらい。先端がとがっている。材質は鉛だろうか、金属でできていた。もし鉛色をしてい

なければ、使い込んで短くなった鉛筆のようにも見えた。
「何？」
オスカーの問いに、ウェンディは首をひねる。
「わっかんない」
そう言ってから、ウェンディは首を振った。
「いや、『思い出せない』というべきかしら。なんか見覚えはあるんだけど……」
それだけ言って、うーん、とうなってしまう。こうなると、ウェンディは何がなんでも思い出そうとして、延々つきあわされることを、ロイドとオスカーは短くないつきあいの中で知っていた。
「どこで見たんだっけかな……おじいちゃんの工房……いや、違うな……本？」
案の定、ウェンディは思考の迷宮に入り込みかけていた。
こういう時は、先手必勝。話題をそらすに限る。これもまた、ロイドとオスカーがつきあいの中で学習したことだった。
「ところでさ、ウェンディ！　これ、直してくれよ」
オスカーが手にしていたものを差し出す。それは、ピストル型のおもちゃだった。ロイドたちの間で流行っていたのだが、これにウェンディが改造をして、輪ゴムを飛ばせるように

したのだ。空想の弾を撃って遊んでいた彼らにとって、それは革命的なことだった。が、これは日曜学校のシスターの怒りを大いにかってしまい、ほとんどの子どもたちが強制的に廃棄させられていた。
　オスカーが持っているのは、その『ピストル狩り』を逃げ延びた数少ない生き残りである。オスカーとロイドはこれで射的をし、ポイントを競いあうのが最近のお気に入りの遊びだった。
「まーた壊したの?」
「壊したんじゃないよ。壊れたんだ」
「同じことよ。どうせ、当たらないからってあちこちいじくって壊したんでしょ」
　図星なのか、オスカーがばつが悪そうに黙りこくる。
「まあまあ。とにかく、ウェンディにしか直せないから、頼むよ」
　ロイドが取りなす。この三人の関係性は、ウェンディがつっぱしり、オスカーが笑ってそれを見、ロイドがだいたい後片付けをする、というものだった。
　ウェンディにしか直せない、というところに技術者マインドをくすぐられたらしい。ウェンディは少し機嫌を直したのか、オスカーの持っていたピストルを手にした。
「まったく、しょうがないんだから……」

　ウェンディは手にしたピストルを凝視した。あまりに凝視しすぎてより目になってしまうほどだ。
　いったい何があるのか、思わずロイドとオスカーも身を乗り出して、ピストルを見つめる。
「これだー!」
　いきなりの叫び声に、ロイドとオスカーはひっくり返った。そして奇声をあげ続けるウェンディ。その様子を猫だけが眠たそうに見ていた。

†

　ウェンディの実家は、工房である。
　クオーツの扱いはもちろん、その他メカ部分のメンテナンスも行える、評判の技師がウェンディの祖父だ。
　その祖父の工房には、山ほどのパーツ、何に使うのかわからないがらくた、クオーツ、設計図と膨大なメモ、そしてゴミとも部品ともつかない何か、が渾然一体となって存在してい

た。一度オスカーが『がらくたの宇宙』という詩的な表現をしたことがあったが、ウェンディはその表現がお気に召さないようだった。

　ウェンディは、幼い頃からこの工房を遊び場としてきた。技術者として気むずかしく頑固と評判だったウェンディの祖父も、孫娘はかわいかったらしく、彼女がこの工房で遊び回ってもほとんど文句のひとつも言わなかった。

　やがてウェンディは祖父の見よう見まねで工具をいじりだし、父親のフェイからもらった鉄道の導力オモチャを分解・改造するなどして、いつの間にか機械に関して一通りの知識を身につけるにいたった、というわけだ。

　そんな祖父の工房に、ロイドたち三人はいた。ウェンディは散らかった机の上に無理矢理スペースを作り、大きくて分厚い本を広げていた。工房には、機械に関する書物も山と積まれており、壁の二面ほどを本棚が占拠していた。もっとも、その本棚の前にもよくわからないがらくたやパーツ、さらには買い足した本などが積み重なっており、目当ての本を探すまでロイドとオスカーはひと仕事をしなくてはいけなかったが。

　ウェンディが読んでいたのは、かなり年代物の本で、大量の挿絵が描かれている、いわば図鑑のようなものだった。そこに描かれている機械も、ロイドやオスカーには見慣れないものばかりである。ウェンディはその挿絵ひとつひとつと、あの短い鉛筆のような謎の金属を、

熱心に見比べていた。ロイドとオスカーはというと、ウェンディの邪魔をしないように本を横目で見つつ、作業を見守っている。

「……違う…………これは…………うーん…………」

　ペラリ、というページをめくる音と、ウェンディの小さな独り言しかしない工房で、ロイドは昔のことを思い出していた。この工房にはじめて足を踏み入れたのは、自分がもっと幼い頃だった。その頃まだウェンディとは友だちではなく、それどころか大げんかをしたのだ。その時にいろいろとあって、ロイドとオスカーとウェンディの三人は、お互いの大切なものを見せ合う、という儀式を経て友だちになった。ウェンディが見せたのが、この工房だったのである。ウェンディの祖父、つまりおじいさんは、近所でも評判のこわいおじいさんであり、ロイドとオスカーはここに入ることをずいぶんとためらったことを覚えていた。

　そういえばあの時は……とロイドが記憶を呼び起こそうとしたその時。

「見つけた！」

　ウェンディの弾けるような声に、ロイドとオスカーが顔を上げる。ふたりが覗き込むと、ウェンディは本のページにある挿絵を指差した。

　そこには、ウェンディが手にしている謎の金属と同じイラストが描かれていた。

「これよこれ！　前におじいちゃんに、これが何かって聞いたことがあったから覚えてて！」

ウェンディは、ずっと気になっていたことが分かってスッキリしたのか、とても晴れやかな表情だ。しかし、ロイドはそこに書かれている文字の方を追いかけて、怪訝そうな顔をした。
「銃弾……？」
「銃弾ってわりには、ずいぶん不格好だよなぁ」
オスカーの言葉に、ロイドもうなずく。ロイドの兄は捜査官で、当然本物の導力銃も持っている。その弾を見せてもらったことがあるが、もっと短いし、なにより短い鉛筆のような形はしていなかった。
そのことをロイドが尋ねると、ウェンディは本のある部分を指差した。
「これは銃弾でも、火薬式のものなのよ」
「火薬……？　それって、花火とかで使う、あれか？」
ウェンディがうなずく。
「銃といえば導力式が普通だけど、ごく一部で火薬式も使われているの。というか、実は火薬式の方が古いのよね」
「古い……ひょっとして、導力革命より前の話？」
ロイドは日曜学校で習った歴史の授業を思い出しながら尋ねた。その言葉に、ウェンディがうなずく。

「そうそう。火薬式って威力はすごいらしいんだけど、メンテナンスが大変だし、使い勝手も導力式と比べて悪いから、使うのはよっぽどの酔狂な人間だって、おじいちゃんは言ってた」
そこで言葉をいったん区切り、眉をひそめて言った。
「……あとは、猟兵団（イェーガー）ぐらいだって」
猟兵団という単語を聞いて、ロイドとオスカーはギョッとした顔をする。猟兵団とは、荒事を専門とする傭兵集団のことだ。その名は畏怖と侮蔑の対象である。クロスベルという街は国際貿易都市なので、猟兵団が流れて来てトラブルを起こすことも、極まれにだがあった。なので、他の街の子どもたちに比べ、より実感を持って恐ろしさを感じていた。
ロイドは、ウェンディの持っている銃弾を見つめる。もしこれが、猟兵団が関連することに繋がるものだったとしたら。そう考えると、背筋がスッと寒くなる。しかし、それと同時に、抑えきれない好奇心を感じていることもまた、事実だった。
オスカーもまた同じようなことを考えているらしく、わずかの恐れと、あふれんばかりの好奇心の目を、銃弾に向けていた。
「じゃあその中には、火薬が詰まってるのか？　バーン！　っていきなり爆発しちまうとか？」

オスカーの問いかけに、ウェンディはあきれた様子で答える。
「そんな簡単に爆発したら、扱いにくくてしょうが無いでしょ。よっぽど強い衝撃を与えない限り大丈夫よ。……って、本には書いてある」
自信満々に答えていたが、最後は少し自信なさげだ。あくまで知識として知っているだけ、という点では、ウェンディの言葉も心許ない。
「うーん……でもこれ、なんかおかしいのよね」
おかしい？　というロイドの問いかけに、ウェンディがうなずく。
「よく見て。おじいちゃんの本に載ってるこの銃弾と、形が違うのよ。ほら、先っぽがちょっと丸くなってるでしょう？」
ウェンディの言うとおり、本に載っているものと違い、ウェンディが拾った銃弾は、先が少し丸くなっていた。
「おじいちゃんの本、すっごく古いから……もしかしたらその後に作られたものかもしれないわね」
そう言って、ウェンディはポケットに銃弾をしまった。
「それじゃ、行きましょう」
「行くって、どこへ？」

オスカーの問いかけに、ウェンディはあきれた様子で答える。
「図書館に決まってるでしょう？　もっとくわしく、この銃弾のこと、調べないと！」

クロスベル市立図書館。クロスベル自治州の中でも、最大の規模を誇る図書館である。
重厚な作りの建物の中には、国内外問わず蔵書であふれていた。国際貿易都市らしく、クロスベル以外で書かれた書物も数多く所蔵されている。このあたりでは珍しい東方の文献なども豊富で、研究者にとっては垂涎の的でもあった。
そんな図書館に、ロイドたちはやってきていた。もちろん、例の銃弾を調べるためである。
遊びたい盛りのロイドたちにとって、図書館などは退屈な場所であり、普段はあまり来ることもない。なので、見るものすべてが新鮮で、ロイドとオスカーはまるで観光客のようにあちこち見回していた。
「ちょっと、何してるのよ。こっちこっち」
そんな中、ウェンディひとりが勝手知ってるといった風に歩いて行く。どうやら、ここにはそれなりに来たことがあるようだった。
木製の大きな長机の一角を占拠し、ウェンディが荷物をどっかと置く。そしてそのまま、大人の背丈よりもさらに高い本棚へと向かった。ロイドとオスカーもそれにならって、あわ

てついていく。ウェンディは流れるような動作で、次々と本を指差した。
「あれと、あれ。あと、あの上にある、赤い背表紙の本。あれもね」
指差す本を順番に見ていたロイドとオスカーに向かって、ウェンディが怒る。
「あのねぇ、ボーッと見ててどうすんのよ。取ってきて」
ふたりはそこでようやく、自分たちが小間使いとして呼ばれたことを認識したのだった。

ウェンディの指示に従い、脚立なども使って本をかき集めると、その冊数は十冊ほどになった。それを三人で手分けして、一冊ずつ当たっていく。例の弾丸と同じものを探すためだ。
だが、その試みはあっという間に失敗に終わった。そもそも火薬式の銃という珍しいものを扱う本自体が少なく、さらに『導力銃を解説した本が、巻末で少しだけ火薬式の銃も扱う』といった体のものがほとんどだったからだ。
ウェンディとオスカーはすでに自分の担当分を読み終わり、最後まで本を丹念に調べていたロイドも、本を閉じ、首を振った。三人は一斉にため息をつく。
「なんでないかなぁ……うーん、もっと技術書がいっぱいある図書館とかないかなぁ」
「ここにないのにー？」
ウェンディのつぶやきに、オスカーがだるそうに返事をする。クロスベル最大規模の図書館にないとすれば、ある見込みがありそうなのは、ツァイスの中央工房にある職人向けの資料室ぐらいだろう。もちろん、そこに行くためのお金も、資料室に入る肩書きも、ウェンディは持っていなかった。
うなだれているロイドたちを、本を抱えて歩く司書が怪訝そうな表情で見ている。ここは子どもの遊び場じゃないぞ、と顔に書いてあるようだった。微妙な居心地の悪さを感じながら、ロイドが声を抑えて話しだす。
「なぁ、これってさ……」
「偽物、なのかしらね」
ウェンディが間髪入れず答える。そして、机の上にある銃弾をボーッとながめた。
「マニアが職人に作らせた模倣品……ってところかしら。面白いものだとは思うけど、マニアにしか価値がないものよね」
すると、それまでだるそうにしていたオスカーが、顔をむくりとあげて言った。
「いや、これ多分本物だよ」
オスカーの言葉に、ウェンディが鼻で笑う。
「なんでオスカーに分かるのよ」
「だってさ、見た感じ本物じゃん」

オスカーの当を得ない言葉に、ウェンディがイラっとした表情を向ける。
「それってただのカンじゃない」
ウェンディの多少険をはらんだ言葉にも動じることなく、オスカーはいつもの調子で続けた。
「んー、でも俺はそう思うけどなぁ」
バカらしい、とひと言で切って捨てるウェンディ。しかし、それまで黙っていたロイドが意外なことを口にした。
「いや……オスカーの言うこと、あってるんじゃないかな」
ロイドの言葉に反論しようとしたウェンディだが、口をつぐんだ。この少し気弱だが思慮深い友人が言うことは、たいがい論理的な思考から導き出されたもので、間違っていることはほとんどなかったからだ。
だから、反論の代わりにウェンディは尋ねた。
「どうしてそう思うの？」
「なぁウェンディ、もし君が火薬式の銃のマニアだったとしたら、この弾を欲しいと思うか？」
「あたしはマニアじゃないから分からないわ」
「いいから」

粘り強くウェンディに問いかけるロイド。その言葉に押されて、ウェンディは自分がマニアだと思い込むことにした。
「うーん……欲しいような、欲しくないような……」
「どうして？　大好きな銃の銃弾なんだよ？」
「だって、本物じゃないから。これは今ある銃弾とは違う偽物だから……あ！」
そこまで言って、ウェンディは何かに気づいたようだった。思わず大きな声が出てしまい、まわりの人から静かにしろ、という厳しい視線が飛んでくる。
それに三人で頭を下げながら応え、ぐぐっとイスを近づけてひそひそと話し出した。口火を切ったのはオスカーだった。
「なになに、ふたりしてどうしたの？」
「偽物は欲しくないんだよ。マニアならなおさら」
「そうよ、どうせ模造品を作るなら、本物そっくりに作るわ。少なくとも、私ならそうする」
ウェンディはかつて祖父の真似をし、時計を作ったことがある。不格好ながらも、祖父の作った時計にそっくりにさせようと、苦心したことを思い出した。
「そう。だから、マニアのための模造品っていうのは、違うと思うんだ」
でも、とウェンディは反論を試みる。

「どうしてどの本にも載ってないの？」
ムキになっているのではなく、本当に分からなかったからだ。と、ロイドは少しうつむいて、ぽつりと言った。
「まだ世に出まわっていない……あるいは、本当は出まわってはいけないもの、なのかも」
「それって……」
ウェンディが言葉を続けようとして、思わずだまりこくる。
試作品、あるいは新製品。クロスベルはあらゆる物が行き交う街である。研究途中や試作品の機械などが運ばれてきても、おかしくはない。
ただ、これは銃弾である。本来ならばおおっぴらにはやりとりできないはずのもので、しかもそれが試作品ならなおさらだ。そこには、なんらかの犯罪組織か、猟兵団が絡んでいる可能性が高い。
ふたりのシリアスな空気を察し、普段はのほほんとしているオスカーも真面目な表情だ。
「……とりあえず、外に出よう」
ロイドの言葉に促され、ウェンディとオスカーは本を片付けるために立ち上がった。
図書館を出ると、太陽がだいぶ傾いていた。影が長くなり、クロスベルの街並が夕焼けに



よってうっすらと赤く照らされている。もう一時間もしないうちに、夜がやってくるはずだ。
そんな中を、ロイド達は言葉少なげに歩いていた。銃弾の正体はなんとなく分かったが、これをどうするかは、まだ決めかねていた。
ふと、ウェンディが立ち止まる。
「……これさ、いっつもいる猫がくわえてたんだよね」
「ミーが？」
「シナモンが？」
ロイドとオスカーが同時に言う。ふたりは顔をあわせ、きょとんとした。
「あの猫、ミーって言うんじゃないの？」
「シナモンだよ。少なくとも、パン屋のおやじさんはそう呼んでたよ」
「おかしいな、うちの隣のおばさんは、ミー、ミーおいでーってエサをあげてたけど」
「あのねぇ、どっちでもいいでしょそんなの」
ロイドとオスカーの会話を断ち切るようにウェンディが大声を出す。
「とにかく！　これの出所、調べてみない？」
「それは……危ないんじゃないかな」
ロイドは真面目な表情で答える。他のものならまだしも、銃弾という物騒なものの出所を

興味本位で探していいものか、正直判断がつきかねた。
「……俺は、警察に持っていった方がいいと思う」
ロイドの言葉に、ウェンディがあきれた顔を向けた。
「警察ぅ？　そんなのダメよ。あいつら、なーんにもできっこないんだから」
なにもウェンディが特別警察が嫌いなわけではない。この街での警察の信頼度は、多かれ少なかれこんなものだった。汚職・ワイロ・職務怠慢。クロスベル警察といえば、頼りにならないもの、使えないものの代名詞のように言われている。それはまさに、ウェンディのような子どもでも知っていることだった。
「私たちがこれを持っていったってとりあわないわよ、どーせ。それか、自分が見つけました－！　って勝手に手柄にしちゃうんだわ」
ウェンディの言葉にはトゲがあったが、言っていることがあながち間違いではなかった。この街の警察は、面倒事は請け負わず、手柄だけは欲するのだ。
「じゃあさ、遊撃士協会は？」
オスカーが言う。この街では、困ったこと、面倒事が起きたら遊撃士協会に言え、と言われるほど、あてにされている存在だ。
「うーん……確かにギルドならとりあってくれるかもしれないけど。でも、結局私たちには

なーんにも教えてくれずに終わっちゃうと思うわよ。せいぜいもらえてあめ玉ぐらいじゃないかな？」
もしこの銃弾が危ないものであれ、危なくないものであれ、遊撃士協会は詳しい事情を話してくれることはないだろう。遊撃士協会はその性質上、秘密主義的なところも少なくない。仮にこの銃弾が犯罪組織のものだとして、有効な手札だと分かった時点で、銃弾のことは秘密にしてしまうだろう。それでは、ウェンディの知的好奇心は満たせないのだった。
「うーん、ギルドもダメ、警察もダメかぁ。あ、でも、ロイドのお兄さんなら大丈夫じゃないかなぁ」
オスカーに言われ、ウェンディはうーんと唸る。ロイドの兄、ガイはクロスベル警察の捜査官だ。
「兄貴は……」
ロイドは思わず口をつぐむ。ガイの所属するチームは激務で有名らしく、深夜に帰宅することもしょっちゅうだった。ロイドはよく、ソファーで着の身着のままで寝ている兄の姿を見ていた。ベッドに倒れ込む余裕すらないほど働き通しなのだ。
「兄貴は……忙しいから」
そう言ってロイドはその案を却下したが、本心は別のところにあった。それは、セシルのことである。
ガイとロイドの共通の知り合いで、ガイより少し年下のセシルに、ロイドは密かな恋心を抱きつつあった。ただ、ロイド自身はそのことにまだ気づいてはいなかったが、ガイとセシルがふたりで笑いあっているのを見たりすると、なにやら不思議な対抗心が燃えてきて、その気持ちに戸惑う、といった風だった。
もし、自分がこの銃弾に関する秘密を見つけ出し、ガイも舌を巻くような活躍をしたら。そうしたら、セシル姉は自分のことを認めてくれるだろうか。
「やっぱり、私たちでこの銃弾の秘密を探るべきよ！」
ウェンディが盛り上がる。
「うん、俺もそうする方がいい気がしてきた。面白そうだし」
オスカーも同意した。
そしてふたりはロイドを見る。ここでロイドが首を横に振ったら、彼らはこの危険な調査をすることはないはずだ。いくらそれが楽しくてやりたいことでも、三人の同意がなければいけない。それが、彼らの間での暗黙の了解だった。
「……やってみようか」
ロイドの言葉に、ウェンディとオスカーは笑顔で返した。

仮に何か危ないことが関わっているとしても、分かった時点ですぐ兄に相談すればいい。そうすれば、兄も無駄な調査をすることはないし、自分たちも危ない目には遭わないはずだ。そうロイドは自分の中で結論づけた。
「それじゃ明日から、調査開始よ！」
ウェンディの言葉に、おー、とオスカーが声をあげる。それにロイドは、ああ、とうなずいた。
足取りも軽く家路に向かう三人。その影は長く伸び、道の上に踊っていた。

†

ロイドたちは、銃弾がどこからやってきたかの調査を開始した。
といっても、当てずっぽうに探していては埒があかない。そこで、この銃弾を持ってきた猫に着目した。
ロイドがミーと呼ぶ、グレーの毛並みがだいぶくたびれたこの猫は、街のあちこちに出没していた。その行動範囲が分かれば、銃弾を拾った場所が自ずと特定できるのではないか、と考えたのだ。
このことを、クロスベルの地図を広げながら、ロイドはウェンディとオスカーに説明した。ふたりの意見は「他に方法も思いつかないし、とりあえずやってみよう」というものだった。
ロイドたちは地道にフィールドワークを進めた。
猫たちを見かけたかどうかの聞き込みは、主にオスカーが担当した。あまり物怖じせず、気さくで話しかけやすい人柄のオスカーは、この手の調査にはぴったりだった。オスカーは老若男女を問わず聞き込みをし、大抵の人がオスカーの聞き込みに応じてくれ、情報はスムースに集まった。
特に歓楽街で働く女性たちにとって、オスカーのような少年は母性本能を含めさまざまなところをくすぐるようで、わざわざ職場の仲間などにも尋ねたりして、情報を集めてきてくれる人もいた。
唯一難航したのは、旧市街。不良のたまり場として有名なこの場所は、さすがのオスカーでも聞き込みを躊躇した。幸い、旧市街の方の情報は歓楽街に住む女性たちから手に入った。彼女たちの住居の多くは、旧市街かその周辺だったからだ。

オスカーとウェンディから集めた情報を元に、ロイドは地図上を色分けしていった。猫が多く見かけられたところは濃い色を、出没頻度が減るごとに色を薄くしていった。
最初はまだらに見えたこの色分けはしかし、あるひとつのルートを見いだすにいたった。
ロイドたちが住む西通りを抜け、中央広場を迂回するように進み、最後に港湾区へと向かうルートだった。
「多分……港湾区の倉庫街だ」
ウェンディの家にある祖父の工房の中。広げた地図を見つめ、ロイドはそう言った。
その言葉に、ウェンディとオスカーもうなずく。
「どうする？　今日にでも見に行くか⁉」
いくぶん興奮した様子でオスカーが語る。
「とはいえだいぶ暗いし、導力灯とかいるわね。頭につけるタイプのやつ、みっつもあったかな……」
ウェンディもだいぶ乗り気だ。そんなふたりを見て、ロイドが慌てる。
「今日はもう遅いよ。こんな暗くちゃ、導力灯の明かりだけで小さな銃弾を見つけるのは難しいし、なにより危ないいんじゃないかな」

慎重派のロイドの意見に、ウェンディもオスカーも不満をぶつけるかと思ったが、あっさりと引き下がった。
「ん～、ま、それもそうか」
「なにより、お楽しみは取っておかないとね！」
ふたりにとっては、どうやら今回の出来事はピクニックか宝探しでもやっているかのようなノリだった。
ウェンディとオスカーは明日の持ち物を何にしようか、と話し合っている。その様子を見て苦笑しつつも、ロイド自身も高鳴りを押さえきれなかった。

クロスベルの街並に帳が下りた、すこし後。
ロイドの自宅の台所では、ふたりの明るい声が響いていた。
「にんじんはカレーに入っているから、サラダは葉物だけでいいわね」
そう言いながら、ロイドにレタスを手渡しているのは、彼より少し年上の女性だ。明るく美しいライトブラウンの髪は軽くウェーブし、肩までかかっている。ゆったりとしたワンピースに身を包んでいるが、胸元はかなりのボリュームがあることがうかがい知れた。
「いい？　レタスをちぎるだけだからって、手を抜いちゃだめ。塩こしょうひとつするときも、

食べてくれる人の笑顔を思い浮かべながらするの。料理は愛情、よ」
「分かってるよ。もう耳にタコができるほど聞いたよ、セシル姉」
そう言いながらもロイドは笑顔だ。この女性は、セシル・ノイエス。ロイドの住むアパルトメント《ベルハイム》のお隣さんで、彼にとっては姉代わりとも言えるほど親しい人だった。
彼女はこうして、ちょくちょくロイドの家に来ては料理を作る。最初は食べさせてもらうだけのロイドだったが、次第に手伝うようになり、今では立派にセシルの助手を務められるほどにまでなった。
「ところで、ガイさんはちゃんとご飯食べてる？ 残したりしてない？」
「あの兄貴が残すわけないだろ？ むしろ、足りないってわめいてるぐらいだよ」
「あら、食べ過ぎは良くないわ。栄養学の見地から言っても、食事というのは適切な量が大事なんだから」
セシルは看護学校に通っていて、看護師を目指している。最近では、会話の端々にこのような話題が出るようになった。
「……でも、そう。残さず食べてくれてるのね」
そう言って優しく、柔らかく微笑むセシル。その頬にはわずかに朱がかかっている。もともと整った顔立ちだが、その笑顔と瑞々しい若さが、彼女の美しさをより一層引き立てていた。それにも増して、恋する乙女は美しい、ということだろうか。
そんなまぶしい笑顔を見て、しかしロイドは、言い得ぬわだかまりを心に感じた。実のところ、セシルのガイへの想いは、一方通行だった。セシルがガイの話をし、自分には向けない笑顔を見せる度。ガイがセシルの想いに気づかず、的外れな受け答えをする度、彼の心には、割り切れない思いが少しずつ溜まっていくようだった。
だからロイドは、そんな気持ちを押し殺すように、もくもくとレタスをちぎった。
「あら？ ねぇロイド、サラダボウルをしまう場所、変えた？」
セシルが流しの上にある食器棚を開けて覗き込んでいる。
「あぁ、最近使ってなかったから、上の段に……」
そこでロイドは黙ってしまった。セシルは棚の上を覗き込もうとして、ぴょこぴょこと小さなジャンプをしている。その度に、彼女の豊満な胸が揺れるのだ。そして、少年であるロイドの身長からすると、その胸は眼前にあることになる。
「っ⁉」
ロイドはとっさに目をそらした。その顔は耳まで真っ赤だ。
その時、がちゃり、と扉が開く音がした。

「お、晩飯はカレーか！　早く帰れた日がカレーなんて、今日はラッキーデイだな！」
　聞き慣れたその声を聞き、ロイドは軽く驚く。その声の主は、ガイだった。ガイがこんなに早く帰ってくることは、めったにないことだった。
「あら、お帰りなさい、ガイさん」
「おっ、来てたのかセシル！　ただいま」
　台所を覗いたガイは、セシルを見つけると、よっと軽く手を上げた。
「兄貴、こんな早くにどうしたんだよ？」
「おいおい、疲れて帰ってきた兄貴に対して、その言い方はないだろう？　まずは『おかえりなさい』」
　ガイはわざとしかめっ面を作り、ロイドに挨拶をうながした。
「おかえり、兄貴」
　その声を聞き、破顔一笑する。
「おう、ただいま。今日はウチの班長がお偉いさんが集まる会議に出るとかで、早じまいだ」
　まるでお店のように話しているが、もちろんガイの仕事は捜査官である。しかも、特別に編成されたチームの。
　ジャケットを使い込まれたイスにかけ、そのままどっかと座り込む。

　セシルはロイドにサラダボウルを手渡して言った。
「ちぎったレタスを盛りつけて。それから、缶詰を開けてツナを上にかけてちょうだい。あ、ツナの油は捨てないとダメよ」
　そして手慣れた感じでコンロに火をつけ、カレーが入った鍋を、おたまでかきまわしはじめた。
「いやぁ、セシルのカレーは最高だからなぁ。ほら、今度新しくできたデパート！　あそこに入った、帝国のどっかの一流シェフが作ったとかいうカレーも食ったんだけど、もうぜんぜん」
「もう、褒めてもなにもでませんよー」
　そう言いながらも、まんざらでもない表情のセシル。
「いやいや、ホントだって！」
　そう言って、ニコニコとセシルがカレーの鍋と向かい合っている様を眺めていたガイだが、ふとテーブルに視線を落とした。
「ロイド、これ……」
　しまった、とロイドは思った。セシルがやってくる前、テーブルに例の地図を広げていたのだ。ウェンディとオスカーはロイドの推理に太鼓判を押してくれたが、念のために最後の

検証作業をしていたところに、セシルがやってきたのだった。
ロイドはかけより、地図をバタバタとしまう。本当のことがバレたら、兄はその銃弾について興味を持つだろう。最悪、警察に引き渡せ、と言ってくるかもしれない。だから、なんとしても隠さなくてはいけなかった。
「ごめん、邪魔だったよね」
「いや。クロスベルの地図なんて色分けしてどうするんだ？　日曜学校の課題か？　にしては、変わったところばっかりに色が塗られてたが……」
ガイが地図を見ていたのはほんのわずかのはずだったが、そこまで見ていたのか、とロイドはガイの観察力に内心驚いていた。と同時に、動揺がにじみ出そうとするのをなんとか押さえつける。
「日曜学校の課題だよ。ゴミがたくさんあるところと、そうじゃないところを色分けしようって」
「ふーん、変わった課題だな。それに、中央広場って人通りの多いエリアだし、ゴミも出やすいんじゃないか？　それなのに色が塗ってなかったし」
しまった、と顔に出かかるのを、なんとかごまかす。
ガイはぽん、と手を打った。
「あ、そうか。しばらく前、シスターたちがボランティアで中央広場のゴミ拾いしてたな。それの次の候補地探しってわけか」
「そ、そうそう！　そんな感じ」
ガイの提案に全面的に乗っかるロイドは、力強く何度もうなずく。それに対しガイは、ふーん、と気のないあいづちを打った。
「ロイドー、カレー皿を出してご飯をよそってちょうだい」
「ごめんセシル姉、その前にちょっとこれ片づけてくるから！」
ロイドは地図を抱え、自分の部屋へと向かった。そして、すぐに戻ってきて、棚からカレー皿を取り出す。ロイドとセシルがカレーをよそう様を見て、ガイはひとり、目を細めていた。

†

翌朝の十時が、ロイドたちの集合時間だった。
「ごめんごめーん！」

遅れて最後にやってきたオスカーが、待っていたロイドたちに手をふってやってくる。
「遅い！」
「悪い悪い。荷造りに手間取っちゃって」
一番乗りだったウェンディは、かれこれ三十分ほど待たされていた。その怒りは頂点に達しそうだった。そんなウェンディの手のひらの上に、オスカーはポン、と紙包みを置く。
「ほい、これ」
「なによ？」
そう言いながら開けたウェンディの顔がいっきにほころぶ。覗き込んだロイドも軽く喜びの声をあげた。
「うわぁ……！」
紙包みの中には、様々なパンが詰め込まれていた。デニッシュにクロワッサン。サンドイッチもある。
「出かける前に、西通りのモルジュでサンドイッチでも、って寄ったんだ。そしたら『ピクニックにでもいくのか？　これもオマケに持ってけ』って店のおやじさんがくれたのさ」
どうやらあまりにウキウキしすぎてて、本当にピクニックだと勘違いされてしまったらしい。

「ま、もらえるものはありがたくってね」
そう言いながら、オスカーは小さくカットされたミニミルクパンをひょいと口に入れた。
「ちょっとー、ひとりだけズルい！」
ウェンディが不満の声をあげる。そして、袋の中に手を入れ、ガサガサと漁りだした。その様子を見て、ロイドがややあきれた表情でふたりをたしなめた。
「ほら、食べながらでもいいから、とりあえず行こう」
おう！　と元気な返事をするオスカーとウェンディ。ふたりはパンをもぐもぐとほおばりながら、港湾区へと向けて歩きだした。やれやれ、と肩をすくめながら、ロイドもその後ろに続く。

そんな彼らを、ひとりの男が見つめていた。年齢は二十代後半だろうか。スラリとした体躯をチノパンにタートルネックのシャツというラフな出で立ちで包んでいる。
そして、隙の無い身のこなし。ある程度武術の心得がある者が見たら、相当の手練れだとすぐに分かっただろう。
もっとも特徴的なのは、腰まで伸びた髪だ。髪は女性もかくやというほど美しいキューティクルを持ち、男の持つ雰囲気をより神秘的にしていた。

彼は眼光するどくロイドたちを見つめていたが、ぽつりとつぶやいた。
「……あれは、確か」
そこまで言うと彼は踵を返し、人混みの中に紛れて消えていった。
港湾区は、近年急激な再開発が進んでいる。
前は倉庫しかなかった寂れた場所だったが、街の方から徐々に建物が浸食するように立てられており、近年では巨大なタワーの建設も噂されている。
しかし、その影響も海の方へ近づけば近づくほどなくなっていき、埠頭近くには昔と変わらない倉庫が建ち並んでいた。
ロイドたちはそのあたりを、下を見ながら歩き続けていた。
「なぁロイドー、見つかんないぞ?」
「……まだ探し始めて一時間も経ってないじゃないか」
だが、オスカーの忍耐力はすでに限界を超えていた。もともと、このような作業は彼の得意とするところではなかったからだ。一方のウェンディは、地道な作業に関しては才能をいかんなく発揮していた。ただ一点、地面を探すのに夢中になりすぎて、積まれている木箱や倉庫の壁に激突するのが問題だった。

（こっちのほうじゃないのかな……）
猫が姿を見せていたのは、確かにこのあたりのはずである。埠頭にはわずかではあるが漁業も行われており、猫たちはそこで捨てられる雑魚目当てに集まっていて、帰り道にあの弾薬を拾ったのでは……と、ロイドは予想していた。しかし、それも推論を重ねた結果でしかない。
いったん休憩を挟んで地図を見直してみようか、とロイドが考え出したその時。
「……ねぇ、これ見てこれ！」
ウェンディが、引き裂かれた紙きれを持ってロイドとオスカーの元に駆け寄った。よく資材を梱包するときに使われる、質の悪い紙のようだ。
「これがどうかしたの?」
オスカーの問いかけに、ウェンディはオスカーの鼻先に紙を持ってくる。
「匂いをかいで」
露骨に嫌そうな顔をするオスカー。ロイドも嫌そうな表情を浮かべたが、ウェンディの真剣な表情を見て、おそるおそる鼻を近づけた。
「……！　これ！」
「火薬の匂い、よ。近いと思う」

その切れ端からは、きな臭い匂いがしていた。
オスカーは思わず唾をごくり、と飲み込んだ。ロイドが真剣な表情で尋ねる。
「ウェンディ、これを拾ったのは？」
あそこ、とウェンディは指差す。倉庫街でも端っこの、かなりボロい建物だった。
「……行ってみる、か？」
オスカーのおずおずとした問いに、ウェンディが答える。
「もちろん！　そのためにここまで来たんでしょう⁉」
そう言って、ウェンディは歩き出す。
「ちょっと待って、ウェンディ……！」
ロイドが止めるのも聞かず、ウェンディはずんずんと歩いて行く。そのまま、倉庫の裏口にある扉の前まで来てしまった。
「ウェンディ、待ってくれ！」
「なによ！　まさか、ふたりとも今さら怖じ気づいたわけじゃないでしょうね⁉」
ウェンディは、眼前に自分の興味の対象があると、こういう風に暴走してしまう。つきあいが長いから分かっていたが、この状況では非常にやっかいだ、とロイドは思った。
「中に誰かいるかもしれない。僕たちは、勝手に入り込むことになるんだぞ？」
「でも、今まで誰も見なかったじゃない」
ウェンディがあっけらかんとした口調で答える。
「それは、そうだけどさ……」
ロイドの言葉から勢いが無くなる。オスカーは、わざとらしく扉に耳をあてていた。
「……中からは、なんも聞こえないぜ？」
よし、と言った風で、ウェンディがドアノブに手をかける。ここまで来ては止められない、ロイドはそう観念した。
「……仕方ない。ただし、中で何かマズいものを見たり聞いたりしたら、すぐにこの場を離れよう。いい？」
わかった、とウェンディとオスカーは真剣な顔でうなずく。そのままウェンディは、極力音を立てないようにドアノブを回し、扉を開けた。
倉庫の中は、ほとんどまっ暗に近かった。ところどころにある窓から、わずかに光が差し込む。そのわずかな光を頼りに倉庫の中を見回して見たが、人影はなく、荷物もほとんどなかった。
「本当に、ここ？」
オスカーが小声で囁き、知らないわよ、とウェンディが返す。

そんな状況で、ロイドはひとり、手にいやな汗をかいていた。ここは何かが違う。空気が重い。鼻につく匂いも気になる。なにより、ここは暗すぎる。まるで闇から、今にも何者かが這い出てきそうだ。

ロイドが引き返そうかと悩んでいる間に、ウェンディは手近な木箱のひとつに近づき、フタを開けようとしていた。思わず声をあげそうになり、あわてて駆け寄る。

「なにしてるのさ⁉」

「なにって、開けて確認するに決まってるじゃない」

「ウェンディ、そっち持って」

ウェンディとオスカーが、木箱の蓋をもってゆっくりと開ける。ロイドが止める間もなく、そのフタは一気に開かれた。

「……なに、これ……」

最初は、ただの黒い鉄の塊だと思った。だが、わずかな光の中で鈍く光るそれは、とても細身で、禍々しい形をしており――

と、次の瞬間、ロイドの頭に激痛が走った。平衡感覚が無くなり、自分が倒れていることに一瞬遅れてようやく気づく。寝転がったまま、オスカーとウェンディが、黒い服を着た男たちに羽交い締めにされているのを見た。

気づくとロイドたちは、倉庫の中でひとつところにまとめられ、後ろ手で縛られていた。口には猿ぐつわをかまされ、ろくにしゃべることもできない。

強制的に口を開けさせられていると、顎が疲労し、力が入らなくなる。ロイドはなんとか脱出をしようと試みたが、あっという間にそんな気力はなくなっていた。

「どうします?」

さっきロイドたちを打ち倒した黒服の男たち。その中のひとりが、ロイドたちを見るとはなしに見ながら、別の男に声をかける。どうやら彼が、この集団のボスらしかった。

「――消せ」

ボスらしき男は、底冷えのする声で言った。

しかし、と反論しようとする相手をギロリとにらみつけ、黙らせる。その瞳は仄暗く光り、得物を狙うハ虫類を思わせた。そのままふらりと動き、ロイドたちの元へやってくる。しゃがみ、ロイドの顔へ自分の顔をグッと近づけた。

「遊び場を間違えたな」

なんの感情も持っていないトーンでしゃべる。

この男は、ロイドたちをいたいけな少年少女としても、ひとりの人間としても見ておらず、

ただ自分の障害物としか捉えていない。歩くときに邪魔な障害物をどかすように、自分たちを『処分』するのだ。そうロイドは感じた。ぞっとした悪寒が、全身を包む。
その時、鈍い音と共に、男の悲鳴が聞こえた。
「ぎゃっ！　ぐあっ！　だはっ！」
そして、ロイドたちのすぐ近くに、いきなり男が吹っ飛ばされてきた。格好からすると、黒服たちの仲間のようだった。
ロイドたちは何が起きたのか把握できなかったが、男たちはとっさに姿勢を低くしつつ、銃を構えた。
「——そこまでだ！」
大きな声が、倉庫の隅にある暗闇から響く。
まるで影のカーテンをくぐるように、ひとりの男性が姿を現した。
（兄貴……！）
それは、ガイだった。見慣れたはずの兄。しかし、その表情は今までロイドが一度も見たことがないものだった。いつも優しいまなざしを向けてくる瞳は、相手を射貫くような鋭さを持ち、微笑みを湛えていた口元はキッと引き締まっている。
そして、手にはいつも腰に下げられていた、愛用のトンファーが構えられていた。

「門番がなかなか通してくれなくてね」
そう言って、吹っ飛ばされてきた男をチラリと見る。どうやらガイが、彼をやっつけてしまったらしい。普段の温厚で陽気な兄からは考えられない苛烈さに、ロイドは驚く。
しかし黒服の男たちは、ガイが単身乗り込んで来たと分かると余裕の笑みを浮かべた。
「へっ！　警官風情がなんの用だ」
「下っ端かぁ？　ここいらは俺らのシマで、警察も手出しはしない。そう話はついている」
そう言って下卑た笑い声を出す。
「その話は先代までだったはずだがな、ルバーチェの下っ端さんたちよ」
ガイの挑発するような口調に、男たちの表情から笑みが消えた。
「こっちはこっちで、話はついているんでね」
その言葉を聞いて、黒服の男たちは気づいた。自分たちが売られたことに。
彼らは新しくやってきたボスのマルコーニになじめずにいたあぶれ者だ。マルコーニは、今までクロスベルでシノギをしていた彼らを使わず、自分が州外から引き入れた手駒を重用した。
しかも、若頭に据えられたのは、元猟兵団（イェーガー）だと言う。力でねじ伏せようにも、相手が悪すぎた。

そこで彼らは密かに銃をかき集め、内部抗争を始めようとしていたのだ。
それをマルコーニ一派と、この捜査官はかぎつけた。しかも、その取り締まりに関しては話がついているという。つまり、いままでのように、警察に捕まっても即時釈放、などということは決して起きないことを意味していた。
男たちの顔に、鬼気迫るものが含まれていく。それに反するように、ガイは不敵な笑みを浮かべた。
「ようやく気づいたか。じゃあ後は、おとなしく手錠をかけさせ……」
男のひとりが素早く動き、ロイドの頭に銃を突きつけた。
「こっちに人質がいるのを忘れたか、警察官（ネズミ）」
頭にゴリゴリと銃を突きつけられ、痛いはずだったが、ロイドは不思議と痛みを感じていなかった。
恐怖で痛みを忘れているのではない。ガイから眼が離せなかったからだ。
この絶体絶命な状況の中で、それでもガイは、眼で語りかけ続けていた。
――大丈夫だロイド。お前たちを絶対に助ける。
「聞いてンのかオラァ！」
男がいらついた声をあげ、撃鉄に指をかける。撃鉄を起こす音も、ロイドはどこか遠くの世界の出来事のように感じていた。
「やっちまえ。ひとりぐらい見せしめにしないと、分からねぇバカみたいだしな」
別の男の声がして、ロイドに銃をつきつけている男が引き金に指をかけた。
大音量の銃声が耳元で鳴り響いたショックで、ロイドは意識を失った。

「……なっ⁉」
ロイドを撃ったはずの男は、抜けた声をあげて手に持った銃を見つめた。
導力銃は、本来の半分以下の長さとなっていた。銃身が途中ですっぱりと無くなっていたのだ。
そして、彼の目の前には、細身で反り返った刀を構えた男がいつの間にか立っていた。先程、ロイドたちを監視するような眼で見ていた、あの男である。その手に持った刀と、全身からあふれ出るオーラが、その男がただ者ではないことを雄弁に語っていた。
男は刀を構えたまま、刀を持ち替えて刀身を反転させた。峰打ちの構えだ。
「――二の型、疾風（はやて）！」
男がつぶやいた次の瞬間には、彼の周りに居た三人の男たちが全員銃を取り落とし、みぞおちを押さえうずくまっていた。

何が起きたのか分からず呆然とする残りの男たち。彼らの前には、いつの間にか距離をつめたガイがいた。そのまま彼らの前で、ひらり、と身体を一回転させる。
「ぐあっ！」
「ぎゃっ！」
「どぅあっ！」
遠心力を使い、トンファーを次々にたたき込む。あっという間に残り三人の男たちをのしてしまった。そのままトンファーをくるくると器用にまわし、腰に吊す。
刀を持った男の方も、刀をひと振りして、腰に吊した鞘に収めた。
「よ、お疲れさん、相棒」
ガイに相棒と呼ばれた男は、わずかに顔をしかめた。
「まさか、身内を危険にさらすような手を使うとはな……」
「お前がいるから、大丈夫だと思ってな」
ガイの言葉に、やれやれと首を振ったこの男は、ガイの相棒にしてクロスベル警察特別チームのメンバーのひとり、アリオス・マクレインである。
「理解できん」
「ま、今回はいろいろ非常事態だったんでな。まったく、ちょこちょこ動き回ってくれちゃって」
そう言いながら、気絶しているロイドたちの近くにしゃがみこみ、彼らの顔を見つめる。先程の銃声で、ロイドだけでなく、オスカーとウェンディも気絶してしまっていた。
「シズクちゃんは、こんなおてんばしないように、しっかりと育てないとな」
最愛の娘の名前を出されて、アリオスがわずかに表情を変える。
「……娘はまだ三歳だ」
「もう三歳、だろ。ちょっとしたらあちこち走り回るぞ？　気をつけないとな」
そうかもしれないな、とアリオスがつぶやき、真剣に考え出す。それを見てガイは、ククッと笑う。最近、こうやってアリオスをいじるのが、彼のお気に入りのひとつだった。
「それにしても……まさかあの地図を使ってこの場所にたどり着いちまうとはな」
ガイはそう言って、ロイドの髪を優しく撫でた。

†

ロイドが目覚めると、見慣れない天井が目に飛び込んだ。ぼんやりとした頭で、ここはどこだろう……と思い出す。

「ッ！　みんなッ！」

記憶が繋がったロイドが飛び起きる。と、すぐにここがさっきまで自分がいた倉庫の中ではないことに気づいた。どこかの建物の応接室だろうか、多少くたびれた雰囲気はあるものの、豪奢な調度品が並んでいる。そして、自分はソファーに寝かされていたようだ。

「ん……うぅ、ロイ……ド……？」

「うーん……ここは……？」

ロイドが飛び起きたのに続いて、ウェンディとオスカーが目を覚ます。彼らはロイドほど頭がしゃっきりしていないのか、まだどこか夢うつつ、といった様子だ。

その時、扉が開いた。

「おっ、目覚めたなチビスケども！」

目覚めには少々響く声を出して部屋に入ってきたのは、ガイだった。その手にはお盆があり、オレンジジュースが入ったコップが置かれている。それをあぶなっかしい手つきで、ロイドたちが寝ていたソファーの前にあるテーブルに置く。

何がどうなっているのか、と口を開きかけたロイドに、ガイは持ってきたジュースを手渡



した。
「ここはクロスベル警察の応接室。無理言って開けさせた。あの黒服どもは、俺たちが全員捕まえたから、もう安心しろ」
　ガイとアリオスが捕まえた男たちは、そのまま留置所へと護送された。街を騒がせるルバーチェ、しかも銃器の密輸入現場を押さえたということで、普段役立たずの烙印を押されているクロスベル警察にとっては、かなりのお手柄となった。今回の件を期に、ガイとアリオス、そしてセルゲイのチームはさらなる名声を得た。しかし、ガイはそれらのことを語ろうとはしなかった。彼らにはそれよりももっと大事なことがあったからだ。
　彼らが落ち着き、オレンジジュースを飲み干すのを待ってから、ガイはロイドたちに尋ねた。
「……で、今回の〝宝探し〟の言い出しっぺは誰だ？」
　何気ない口調だったが、ロイドたちは震え上がった。これだけの騒ぎを起こしてしまったのだ。酷く怒られるに決まっている。
　三人はお互いの表情を見つめた。オスカーは今にも逃げ出したい、という顔をしていた。ウェンディは、本気で今にも泣きだしそうだ。ロイドはというと、何かを諦めたような、そんな表情をしていた。

「……俺が言い出したんだ、兄貴」
　ロイドが伏し目がちに手を上げる。すぐさま、ウェンディが続いた。
「ちっ、違う！　もともとあの銃弾を見つけたのは私！　だから……」
「それなら、俺だって！　……その、探そうぜってふたりに言っちゃったし……」
　ウェンディとオスカーの語尾は尻すぼみになっていく。その様子をガイはじっと見つめながら、次の問いを切り出した。
「よし、言い出しっぺは全員ってわけだな。それじゃ……リーダーは誰だ？」
　三人は再び目配せをし合う。今度はロイドが強くうなずいた。
「俺だよ」
　今度は、ちゃんと目を見て言えた。誰が言い出したか、という点は曖昧だが、リーダーなら明確だ。状況に流されつつも、いつも大事なことは自分が決めていた。ロイドには、その自覚があった。
　ガイは、そうか、とつぶやき、次の瞬間。
　ロイドを平手打ちした。
　さっきの銃声を耳元で聞いた時よりも、衝撃があった。一瞬何が起きたか分からず、次の瞬間には自分が床に倒れているのに気づく。打たれた頬が、ジンジンと熱い。

倒れこんだロイドを見て、オスカーは思わず身を引いた。ウェンディの目からは涙があふれている。そんなロイドを見て、ガイは部屋の外まで響き渡るような声で怒鳴った。

「リーダーなら！　仲間の安全を第一に考えろッ‼　仲間の命を危険にさらすような奴は、リーダー失格だッ‼」

打たれた頬も痛かったが、それ以上にガイの言葉はロイドに突き刺さった。

本当はどこかで分かっていたのだ。あの銃弾は、とてもやっかいで、仄暗い何かを運んでくることを。だが、自分の力で何とかできるのではないかと勘違いしてしまった。あの銃弾は、文字通り人を傷つけ、死をもたらす。例えそれが銃身にこめられていないとしても。やはりあの時引き返すべきだったのだ。倉庫に入る前に。ウェンディとオスカーが、木箱のフタを開ける前に。しかしそのことに気づいたのは、男たちに捕まって、すべてが手遅れになった後だった。

ガイを出し抜き、手柄を立てて褒められたい、認められたいと願っていたはずなのに。結局今回も、守られるだけの存在でしかなかった。

自分は、弱い。

その事実を突きつけられ、ロイドの胸は涙であふれそうだった。

ガイが一歩ロイドに近づく。また叩かれるのだろうか。だが、それでもいい。今はただ叩かれ、無力さをかみしめ、打ちのめされたい気分だった。

ロイドがギュッと目をつぶった瞬間、ふわり、と大きなものが覆い被さった。

「え……」

ガイが、ロイドを抱きしめていた。

「……あんまり心配かけさせるな。……お前が死んじまったら、父さんと母さんに……俺、なんて言えばいいんだよ」

ガイはそう言って、鼻をすすった。

包み込んでくれる兄の身体は大きく、暖かくて。

ロイドは悔しさとはまた違う理由で、涙があふれて。

「兄貴……ごめん……ごめん……ッ！」

ただ謝り続けながら、ガイの胸で泣いた。

ガイはロイドの背中をポンポンと叩き、そのままオスカーとウェンディもまとめて抱きかかえる。

「ううっ……うわあぁぁぁぁっ！」

「こわかった……こわかったよぉぉ！」

泣きじゃくる三人の子供たちを力一杯抱きしめ、ガイが微笑む。

その瞳にわずかに光るものがあったが。それを見ている者は、空の女神（エイドス）以外に誰もいなかった。

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



3名様

『も～っと集まれ！ファルコム学園』缶バッジ

大人気!! オリジナル缶バッジを5個セットで3名にプレゼント！ ※絵柄はランダムです。

ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、（falmaga@field-y.co.jp）まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.157プレゼント係

1：お名前（ペンネーム可）
2：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→（記事一覧から1つずつ）
3：アンケート①2024年は『軌跡』シリーズ20周年！
　思い出をひと言！
　アンケート②初めてプレイした『軌跡』シリーズは？
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

記事一覧

1：イース・メモワール
　-フェルガナの誓い-最新情報
2：も～っと集まれ！ファルコム学園
3：ファルコムニュース
4：暁の軌跡最新情報
5：英雄伝説 碧の軌跡 ショートストーリーズ

応募締め切り 3月27日（水）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol. 157

発行人 田中一寿

発行協力 日本ファルコム株式会社

編集 小渕智幸
河野崇

デザイン・DTP 株式会社 ACQUA

表紙ロゴデザイン 荻窪裕司（デザインクロッパー）

発行 株式会社フィールドワイ
〒 101-0062
東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F
TEL 03-5282-2211（代表）
http://www.field-y.co.jp/